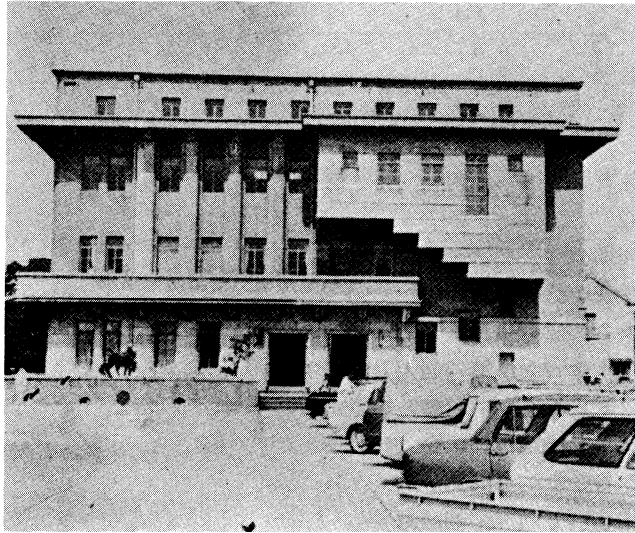


# 東海体育学会

30年のあゆみ



名古屋大医学部図書館  
東海支部学会第1回研究発表会場  
(昭和26年10月24日)

# 目 次

発刊にあたって	1
会長あいさつ	3
祝 辞	4
東海体育学会の沿革	11
I. 東海体育学会の草創期	
1 設 立	
2 初期の学会の活動	
II. 東海体育学会の台頭期	
1 学会の組織化と学会活動の活発化	
2 日本体育学会第12回大会の開催	
3 年次を追っての活動と新企画の数々	
4 更なる飛躍への鳴動	
III. 東海体育学会の発展期	
1 新しい方向への瀬踏み	
2 新組織による飛躍	
3 第20回支部学会記念大会と日本体育学会第24回大会	
4 東海地区体育学研究助成会の発足	
5 年次発展の経緯	
IV. 東海体育学会の充実と更なる発展を旨として	
1 研究誌の発刊	
2 東海体育学会の充実	
3 充実と更なる発展の系譜	
東海地区における全国学会の開催	57
月例研究会、講演会の開催	63
会報の発行	81
「東海保健体育科学」の発行	91
研究グループ活動	95
1. 運動生理学、バイオメカニックス(火曜会)	
2. 体育社会学研究会	
3. 運動心理学談話会	
4. 体育史研究グループ	
5. 体育経営学研究会	
東海地区体育学研究助成会	111
座 談 会	119

**目****次**

会員の声	133
今後の課題(現状と展望)	145
<b>資料編</b>	
資料1 沿革年表	152
資料2 会則の変遷	191
資料3 日本体育学会東海支部会会員数の推移	198
資料4 東海保健体育科学掲載論文及び執筆者一覧	199
資料5-1 日本体育学会東海支部大会年次別発表演題一覧	202
資料5-2 日本体育学会東海支部会発表演題数	236
資料6 支部学会員の全国学会発表演題数	237
資料7 支部会員の「体育学研究」掲載論文数	238
編纂後記	239



# 発刊にあたって

東海体育学会 理事長 勝 部 篤 美

体育に関する学術的研究活動と、その普及をめざした学術団体である日本体育学会は、1950年2月に設立された。そして、その翌年4月には、全国にさきがけて東海支部が設立され、爾来30年、日本体育学会東海支部会の名称のもとに東海地方において活発な学会活動が展開されてきた。

この会は、1982年の大会30周年を機会に東海体育学会と改称され、同時にこれが日本体育学会東海支部を兼ねることとなった。

創立当初は数十名に過ぎなかった学会員の数も、今では静岡・愛知・岐阜・三重の東海4県下の会員合わせて約450名に達し、会員の活躍の舞台も単に東海地方や日本国内のみに限らず、海外の体育学研究・教育機関にも及び、さらには国際学会の名古屋開催をも引受けた実績を有するところまで成長を遂げた。

これらは、この学会発足以来の歴代会長の絶大な御尽力と、理事会役員および会員諸賢のたゆまぬ御努力のたまものと存じ、御同慶にたえない次第である。

このような発展的経過をふまえ、昭和54年度第3回理事会において、昭和57年度に開催される予定の第30回大会の記念事業として刊行物を出してはどうかということが議せられ、それに備えてとりあえず資料収集だけはしておこうということになった。

その後、しばらくの間は具体的な動きはなく、この問題は毎年度次期理事会への申し送り事項とされてきたが、昭和57年度の理事会において事業計画に組み込まれ、具体的に進展する運びとなった。

当初は、この会の30年間の変遷・推移について簡潔にまとめた刊行物を出すという程度に考えられ、その内容・方法等については研究担当理事と広報担当理事があたることとし、とりまとめ役を川口光雄理事にお願いしていた。その後の具体化の段階で、理事会内に30年史編纂委員会を設けてこれに当たることとなり、川口氏を委員長とし、宇津野年一、川島虎雄、木村吉次、山田久恒の各氏を委員とし、必要に応じて若干の補佐をおいて仕事を進めていくことになった。

その後の仕事の進捗により、委員が労苦をいとわずに収集した資料はかなりの

数量に達し、これらを使いこなして刊行するとすれば部厚な本になることが予想された。それでも折角やりかけたからには、より満足のいくものにしたい、かといってそれには資金がかさむが、さてどうしたものか、という資金面との兼ね合いで苦慮することになった。

しかし、この問題も、幸いなことにこの会が日本体育学会第12回大会を引受けて開催した際の余剰金の残金があり、また同じく第24回大会の余剰金によって設立された東海地区体育学研究助成会から多額の補助金を受けることになり、これらによって解決されることが可能となった。

編纂委員会で樹てられた企画によると、本書は東海体育学会の沿革についてかなり詳しく記されていることはもちろん、それ以外に東海地区における全国学会の開催や各種研究会・講演会の開催、会報発行、学術誌「東海保健体育科学」の刊行等、諸行事・諸活動の中味についてかなり詳しくうかがうことができる。また「30年の足跡をたどる座談会」や「会員の声」によって、より生々しく過去から現在への推移を知ることができようし、さらにそれらを踏まえた「今後の課題」から未来的展望をきりひらくという一連の貴重な道程を歩むことができそうに思われる。

また、巻末に掲げられた多種にわたる資料は、それぞれ東海体育学会の研究的発展の状況を俯瞰するに足る貴重なものである。本書を今後に生かし、東海体育学会の一層の進歩と発展を祈念して、本書の序にかえさせていただきたい。

終りにのぞみ、編纂委員として御苦労をおかけした前記の川口、宇津野、川島、木村、山田の各氏、ならびに補佐として多数の地料の収集・整理を行なって下された鈴木文明、川西正志、山本英人の各氏に対して厚く御礼申し上げる次第である。とくに川口光雄委員長と鈴木文明補佐には、多大の時間を費し、労苦を重ね、委員長自身執筆に健筆をふるっていただきましたが、ここに深甚の謝意を表します。

また、本書にわざわざ祝辞をお贈り下された日本体育学会会長水野忠文先生、ならびに本書の刊行に多額の補助金を出して下された東海地区体育学研究助成会に対して、厚く御礼申し上げる次第であります。

# 東海支部会30年史の 発刊にあたって

東海体育学会 会長 川 島 虎 雄

本学会が第1回の学会大会を昭和26年10月24日に名古屋大学医学部図書館の講堂で開催してから30年余りとなる。この間、第4回、第12回、第24回の全国大会も開催している。

今回、東海体育学会が歩んできた30年余りの変遷や推移をまとめて発刊することになった。この大事業は川口光雄編纂委員長を中心に委員、会員の絶大なご協力により、「東海支部会30年史」の発刊のはこびとなったことは、われわれ学会会員一同のよろこびであり、誇りである。

わが東海体育学会が今迄学問研究に大きな貢献をしてきていることは周知の通りであるが、先輩諸兄が築いてきた業績を顧みて、将来の学問研究の参考となるならば幸甚である。

日本体育学会東海支部は東海体育学会と名称が変わった。毎年行われる学会大会での研究発表も多い。「東海保健体育科学」もすでに第6号をかぞえている。このように東海体育学会がますます充実発展してきていることは本当にうれしい。

刊行にあたり、関係各位のご協力を感謝するとともに、会員の皆様のご活躍を心からお願いして発刊を祝う次第である。

# お祝いのことば

前日本体育学会会長 水 野 忠 文

この度貴東海支部におかれましては、支部より一層の発展を期して、支部をかねて東海体育学会を発足させ、あわせて「日本体育学会東海支部会 30 年史」の編纂を企画されましたことは誠に御目出度いことでありまして御同慶の至りと存ずるところであります。

顧みますと、日本体育学会が創設されましたのは、昭和 25 年(1950) 2 月 11 日でありまして、大学体育が発足した第 1 年度のことでありました。当時は敗戦後の混乱がなお続いていた頃であり、新制大学発足間もない頃でありまして、何事につけ「ないない尽し」の時代でありました。運動施設も貧弱で、運動用具も極めて乏しく、食糧ですらも不足であり、学生も裸足でグラウンドを駆け廻るという時代でありました。それでも体育は、はじめて大学の責任において正課として実施されることになったのでありまして、誠に画期的な出来ごとでありました。大正 8～13 年に実施された高等教育機関の大拡張期の時は、高等教育機関として明治 10 年代からはじめられていた体育を 3 年間必修として教育課程に組み入れ、運動場や雨天体操場なども立派に整備した上で開始されたのでありました。

ところが大学体育は、物的には恵まれることがないままの船出であったのでありまして、上記の大拡張期の旧制高専の場合と比較すると誠に苦しい門出であったと申すのが至当でありましょう。しかしこのような事情の下の大学体育の発足は物的には誠に恵まれなかったとはいえ、われわれ大学体育にあたるものは 70 年の長きにわたった「体操時代」の体育のあり方を克服して、理想に燃えて出発したのでありました。今思えば文字通り苦悩の出発ではありましたが、気力は充実した前進であったといえましょう。

その頃のわれわれの考えは、大学自らが大学生に体育を実施するのであるから、その指導は保健を含めて学問に根ざした体育でなければならない、それには何としても一刻も早く研究体制を確立しなければならないというのでありました。しかし、大学生に与えられるわずかの体育実技の基盤となるべきその学問的な支えは、如何といえ返ってくるものは、極めて乏しく、その蓄積も少なかったこと



は一層体育学の建設要求を強め、大学体育第1年の終りまでに早くも全国統一学会としての日本体育学会が設立されることになったのであります。そして学会の会員は日を追って増大し、たちまち人文・社会・自然の各領域にわたる全国統一がここに発足するに至ったのであり、つづいて、学会支部が次々に全国のあちこちの府県で結成されていったのであります。

東海支部におかれては、昭和26年に支部を結成され、結成早々日本体育学会第4回大会を名古屋市において開催された、年次大会が東京を離れて地方支部が受け持つ慣行の確立に大きく貢献されることになったのであります。この支部における大会開催の勇断は貴支部が全国の支部の先頭を切って為されたものであり、本学会発展史上に重要な契機をつくられたものとして、広く学会員の記憶に残っていることであらう。そして貴支部におかれては上述したようにさらに2回の年次大会を受けもたれ、全国支部に向って東海支部の存在を明らかにされ、その果すべき役割の実を示されたものといえましょう。

貴東海体育学会は、これまでの東海支部の果してこられた業績を引継ぎ、発展していられるだけでなく、体育学の新しい理論の樹立、新しい法則の発掘、さらにはその応用活用に十分な指導的役割を果され、真に学問に裏打ちされた体育実践の実りがあるように存分の力を注がれることを切望してやまないものであります。

東海支部会30年史の刊行を祝し、私の所懐の一端を述べ、東海体育学会の今後の御発展を心から御祈り申し上げる次第であります。

# 30年史の発刊を祝して

元東海体育学会会長 川 村 英 男

日本体育学会東海支部会の創設満30年に当り、その30年史が発刊されますことは、まことによろこばしいことでありまして、心からお祝いを申し上げます。

ご承知のように、日本体育学会は昭和25年に発足しましたが、会員の増加に伴って、全国各地に相ついで支部が設けられました。東海支部はその中でも早期に結成されて、しかももっとも活発に活動をしている支部であります。私はその最初から日本体育学会員でしたが、東海支部会員となったのは昭和29年でした。実はその前年28年に第4回大会が名古屋で開かれましたが、この頃に私の名大転勤が内定し、29年に広大から名大に移り、同時に東海支部会員となったのです。

この第4回大会は、地方で開催された最初の大会でしたが、立派に大会が運営されて東海支部の評価が高まりました。

当時は鯉沼先生がお元気で支部会の先頭に立っておられました。戸荻先生からは、個人的にも数々のご指導を戴きました。

その後、理事に推薦された私は、全国理事会にも毎回のように出席しましたが、そこでは東海支部は全国で最もまとまりがよく、事務的な面でも信用できる支部であると好評を得ていました。それは会員の協力と、事務担当の安藤義玄氏（故人、当時は名大学生課職員）の努力によるものであったと思います。

東海支部は第4回大会の後、第12回、第24回と併せて3回の大会を引き受け、輝かしい成果をおさめています。第24回大会には、私は九州支部会員として参加しましたが、実験的デモンストレーションによる研究などもあり国際色豊かな大会で、流石に東海支部だという感を深くしました。

福岡で13年間を過してこちらに帰り、再び東海支部の一員に加えて戴きました。そして支部が満30年を迎えたとききまして、本当に感慨無量でした。

30年史の責任者となられた川口先生から、過去のことをいろいろ尋ねられたのですが、肝心のことを忘れまして、先生に大変申し訳なかったと思っています。しかしお話をききまして、だんだんに甦ってくるものがありました。全くの浦島

太郎にならなかつたと安心しています。

その間に、支部創設にご尽力戴いた鯉沼先生、それを継がれて基礎を一段と固められた戸亥先生、その基礎に立って進展の方向づけをされた中西先生、その3人の先生方はともに故人となりました。ここに慎しんで、3人の先生方の御霊に深い感謝を捧げるとともに、ご冥福をお祈りしたいと思います。またこれらの先生方ともども支部会のため献身的にお返し下さった先生方のご健康とご多幸を併せてお祈りする次第です。

今日、名簿によって支部会員を数えてみますと400名を遙かに超えており、大世帯に成長しました。またその中には若い会員が多くなっていることに驚きを覚えます。このことは支部の将来にとってまことに心強いことですが、同時に私は時の流れというものを痛いほど感じます。

さて、東海支部会は、30年を機として、東海体育学会と名称を改めました。このことは過去30年の実績によるもので歴史の重さを感じさせられます。この大きな支部会の節目に当って、その過去を顧み、その足跡の記録を残すということは、極めて大きな意義があると思います。

支部会創設当時の先生方のお話しによりますと、「和」を支部運営の基本方針としたということです。もっともまとまりのよい支部と評価されたことも、前後3回の大会を立派に遂行したのも、支部会員の「和」の賜のように思われます。そこには当初からの「和」の精神が、30年の歴史の中で受け継がれてきたことを示しているといえましょう。東海体育学会にもこの「和」は継承されるものと思います。個人としても、学会としても、その業績をあげ、発展していくためには、人の和、それぞれの持場を守りつつ相互に協力することは欠かせない条件だと思えます。

東海支部30年の歴史をふまえて、東海体育学会が、一段と発展されますことを心から念願いたします。

終りに、この30年史のため、混沌として雲散霧消の危機にある資料を、八方手をつくして蒐集・整理され、今回の発刊にこぎつけられました先生方に深甚の敬意を捧げまして、お祝のことばといたします。

# 東海体育学会30年史の 発刊を祝って

前東海体育学会会長・日本体育学会理事長 松 井 秀 治

先づもって30年誌の発刊を心から御祝い申し上げます。編纂の声が出ましてからかなりの日数を要しましたが、それだけにかかる学会の記念誌としては、まことに行き届いた内容のものとなりました。若い学会員にとって本記念誌の通読は、そのまま日本体育学会史発達への理解に通ずるものといっても過言ではありません。

本文中にも詳述されていますが、東海体育学会は昭和24年新制大学の発足にもなり大学体育の開設を契機として、佐々木久吉教授(当時愛知学芸大学)、筒井健市教授(当時名古屋工業大学)、等が呼びかけ人となり、鯉沼茆吾教授(当時名古屋大学医学部衛生学担当)、戸茱近太郎教授(当時名古屋大学医学部解剖学担当)等の指導のもとに、研究会を持ったのがその最初のきっかけといえます。この集りは翌年の昭和25年5月、当時の名古屋大学学長勝沼精一先生を会長とする、東海地方大学体育審議会として発展しており、更に、ほぼ時期を同じくして創設をみた日本体育学会への参加組織体として、昭和26年日本体育学会東海支部会として、いわゆる正式な学会としての発足を見ています。

当時東京大学教養学部の助手として、日本体育学会創設の幹事役加藤橘夫教授のもとで、創設業務の下働きをしていた私は、東海地方の先に挙げた方々を中心としての学会づくりへの意欲を、驚きとともに誠に頼もしいものと受けとめていました。かかる信頼感はその当時の、幹部の方々にも強かったと思います。第4回にして始めて東京を離れての学会大会を開催することになった時、名古屋が選ばれたことが何よりの証拠といえます。

東海体育学会創設時の意欲はそのまま東海体育学会の特長を作ることにつながっています。それは人の和、特に各々がその能力と持ち分に応じた、力を出し合って物事を遂行するという協力体制の確立であります。勿論、その時々を世話を世話する人々の気くばりが、その背景として大きく作用しているといえますが、他の分野の人々が卒先して体育学の進歩のために、学会の組織化と運営に協力された東海体育学の創設の精神が基盤となっているといっても過言ではありません。

ん。

私事に関する点もあるのはお許しいただくとして、研究面からその例を紹介しておきましょう。私が東海体育学会の一員となったのは、昭和32年10月名古屋大学への就任時ですが、来てみて非常に感銘したのは学会が組織ぐるみで、共同研究をすすめる努力をされていることでした。

本文にも記載されていますが、名大医学部の井上教授（現中部大学教授）の指導によるアイススケートの共同研究が行われ、研究活動とともに体育の研究者育成に努力されていました。大須のアイススケート場で、ハンドタイプライターを叩いてタイムスタデーをしておられた、八木菊郎先生（当時名大）の姿が昨日のように思い出されます。

私が名古屋大学の体育研究室でセミナーを始めたのも、こうした学会ぐるみの研究活動への一翼としてのものです。具体的に始めたのは昭和33年の初夏からです。それは約8ヶ月の単身赴任生活を終って桜山の官舎に住むようになったとき、当時東海体育学会会長をしておられた戸刃先生、理事長の中西栄作先生、およびそれまで直接指導されてこられた井上先生や川村英男教授（当時名古屋大学）から、名古屋に生活の本拠も出来たのだから、これからは大学の方の仕事は勿論だが、学会の若い人々の研究活動についての世話にも、力を入れてほしいとお話があったからです。いわれるまでもなく私もその心積もりでしたので、このお話を契機に身近な人々に呼びかけ、皆さんの最も集りやすい時間ということで土曜日の夕方に会をもつこととしました。この集りは時の推移とともに曜日や集るメンバーも変わりましたが、今日なお、名古屋大学総合保健体育科学センターを会場に、火曜日セミナー（通称火曜会）として続けられています。少し口幅ったい言い方になりますが、このセミナーは、東海体育学会は勿論、広く日本の体育学研究発展への1つの渦づくりの役割を果たしてきたとあっていいでしょう。

当初は山田彰、寺沢健次、竹内伸也（以上当時愛知学芸大学）、八木菊郎、山田久恒（名古屋大学）、川口光雄、小川芳子（当時南山大学）の諸氏と小人数でした。やがて、大学新設ブームや学生増募による大学体育担当者の増加は、セミナーへの参加者を増加するとともに、研究の発展にともなう研究分野別の新しいセミナーの会が順次つくられています。まことに悦ばしいことといえます。しかし、この傾向について祝辞に加えて一言付言して置きたいのです。それはこうしたグループのセミナーまたはコロキウムは、単なる情報交換の場としてのものではなく、お互の研究協力の場であることを忘れないでほしいということです。

各大学の研究室整備は近年かなり推進されたとはいえ、他の科学分野に比較し

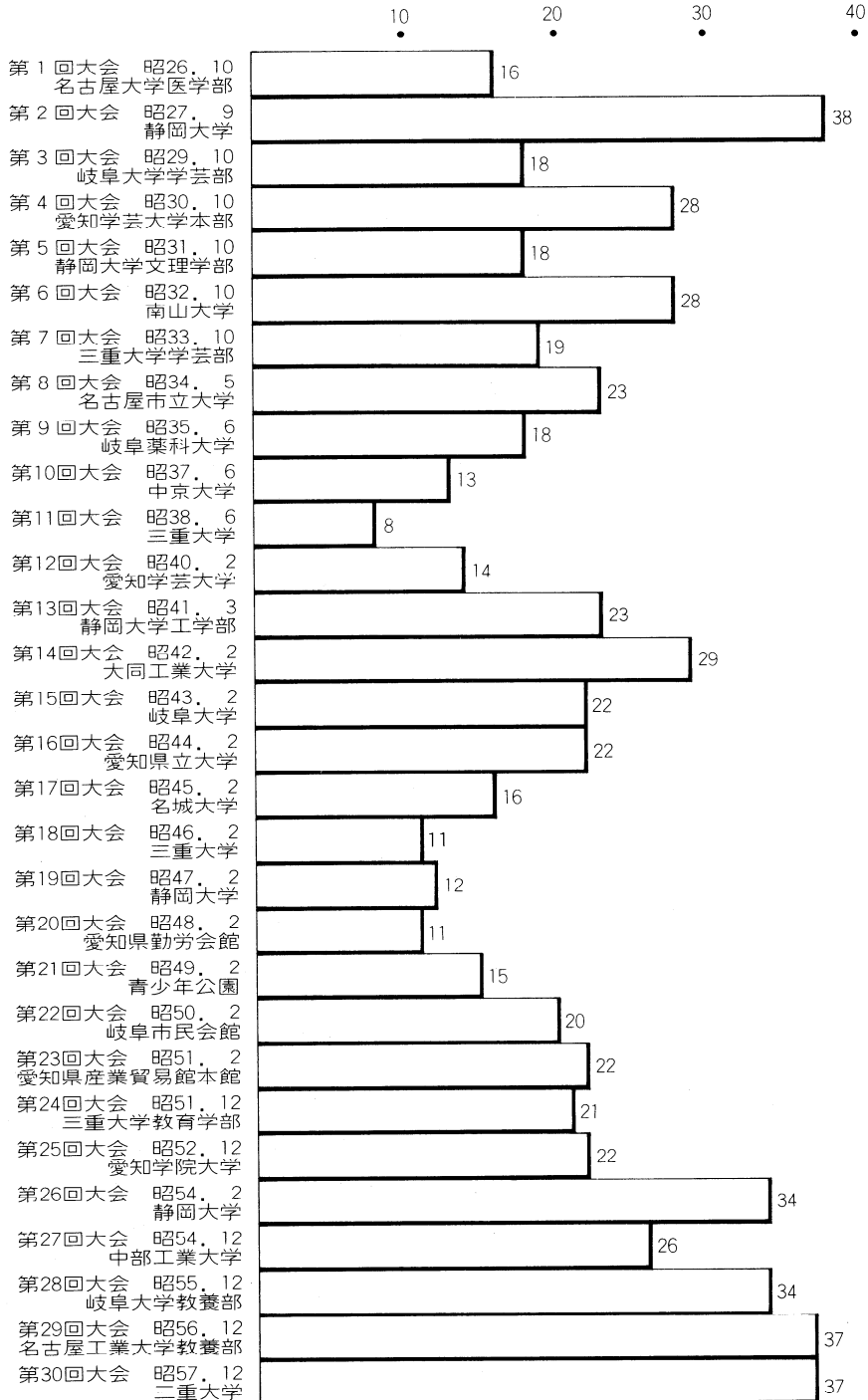
た場合まだまだ不十分といえます。この不十分さを物的にも人的にも補完し合うのが共同研究であり、研究協力なのです。この面では少なくとも東海体育学会は、日本の体育学研究の場における模範であったといえます。

体育学はその研究が進めば進むほど、他の科学以上に *integrate* を必要とする科学です。東海体育学会ではその伝統的協同性を生かして、学会という機関としてその働きかけを忘れないようにお願いします。おそらく会員数が 5000 近くなった日本体育学会においても、学会運営の基本型はそうした方向への働きかけが中心となるように思われます。今日まで常に先導的試行を示して来た東海体育学会に、その原型的試行を期待するのは私一人ではないでしょう。

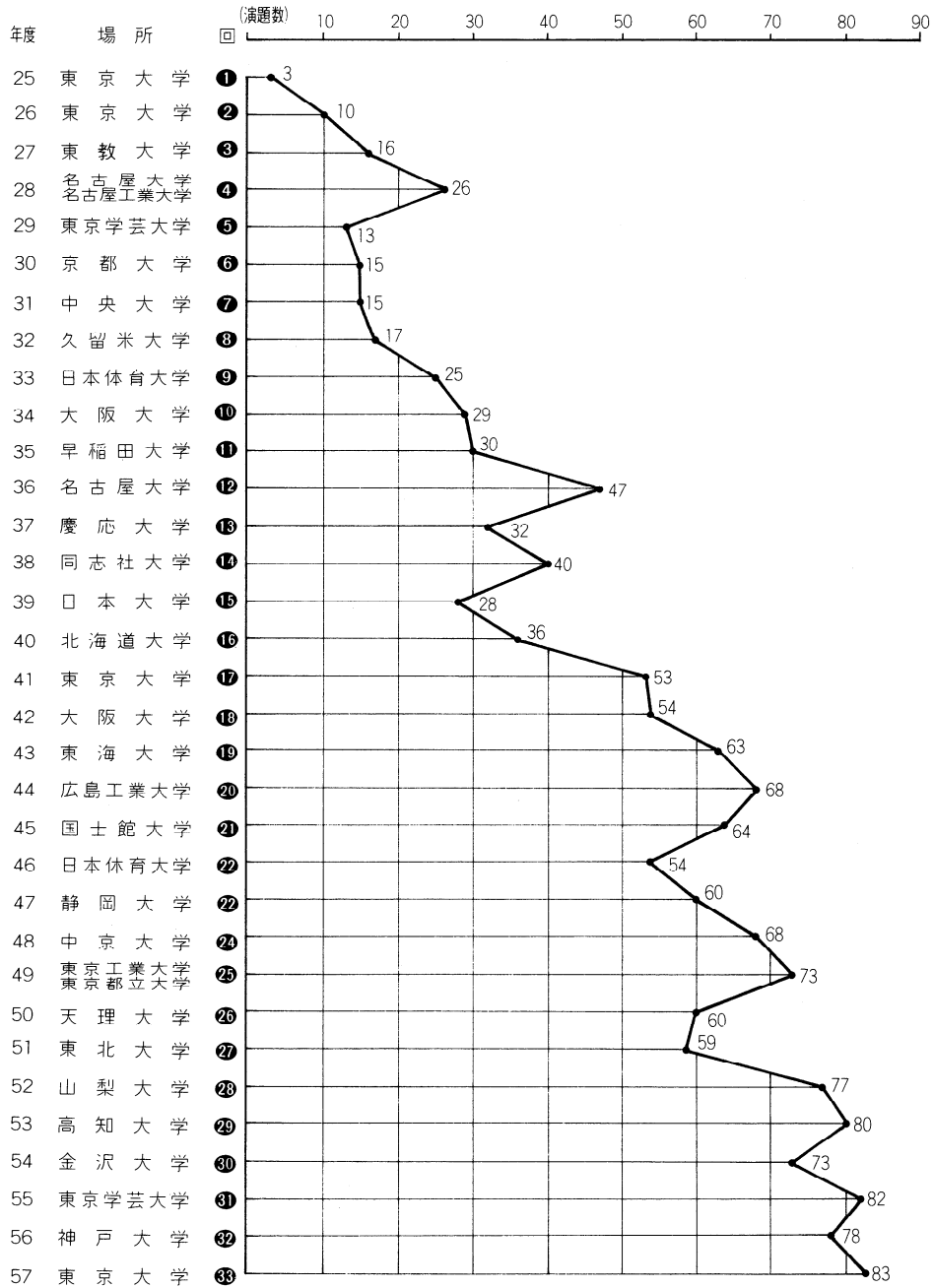
過去を振り返って整理することは、次の発展への起爆剤を蓄積することになります。東海体育学会 30 年誌が、東海体育学会員の 21 世紀への体育学研究の起爆剤となることを心から祈念いたします。



## 日本体育学会東海支部会発表演題数推移



## 年度別にみた支部学会員の全国学会発表演題数注)



注) 発表演題数は支部学会員が共同研究者として参加しているものも含んでいる。

資料7

支部会員の「体育学研究」掲載論文数

昭和 26 年度	2	昭和 45 年度	3
“ 27 “	1	“ 46 “	7
“ 32 “	2	“ 47 “	5
“ 33 “	4	“ 48 “	4
“ 35 “	4	“ 49 “	5
“ 36 “	6	“ 50 “	4
“ 37 “	1	“ 51 “	6
“ 38 “	2	“ 52 “	3
“ 39 “	2	“ 53 “	4
“ 40 “	1	“ 54 “	8
“ 41 “	3	“ 55 “	7
“ 42 “	3	“ 56 “	9
“ 43 “	5	昭和 57 年度	4
昭和 44 年度	9		

資料編について

資料の収集は編集委員と、その補佐が行った。また整理、記述、作図、作表については、下記の者が分担した。

資料1	川口光雄	資料2	山本秀人
資料3	鈴木文明	資料4	川西正志
資料5-1	川西正志	資料5-2	鈴木文明
資料6	鈴木文明	資料7	鈴木文明

## 編 纂 後 記

10年ひと昔というが、30年の歳月を振り返ると、ずいぶん昔のように思う。しかしこれを現代的感覚でみると、ついこの間のようにも思える。

東海体育学会30年史の発刊が、最初に話題となったのは昭和54年6月の理事会であった。資料の収集だけでも手をつけておいては、という意見が出されたが何故か具体化されなかった。その後、事務局の移転や名古屋オリンピック誘致などの問題が起り、30年史の発刊は忘れたかにみえた。

ところが昭和57年3月の理事会で、年度の事業計画が討議された際、支部学会が30回目を迎えるので、特別に記念行事を考えてはとの発言があって、30年史の発刊が再び話題となった。そして4月の理事会で、支部会発足当初より会員であった現理事を中心に編纂委員5名が選出され、30年史の発刊が具体化することになったのである。

先ず、手もとにある資料によって、沿革の骨子となる年表作成に着手した。ところが支部会発足当時の10年位が空白に近いので、それを補足すべく当時の関係者をお訪ねし、記憶を呼び起していただいたものをテープに取めたり、印刷物など、どんな些細なものでも収集に努力した。その結果十分とはいえないまでも、何とか形を整えることができたと思う。それ以降の資料も同時に収集したが、積みあげられた資料をながめて、いまさらながらその量の多さにとまどい困惑した。そこで川西正志氏、山本秀人氏、鈴木文明氏の若手3名の会員に、理事会の議を得て編纂の協力をお願いすることとなった。しかし、いずれの方も教育と研究という本職のある身、その合間にやる仕事で進行は思うにまかせず予想外の日時を費してしまった。

肉付けされた沿革年表を通覧し、30年の星霜をかえりみると、ただ単に月日の流れ、時代の推移を感じるだけでなく、その時代を適確に把握し、しかも将来を見通してその時代、その時に正確に対応された輩諸氏の叡知と実践力をひしひしと感ぜずにはおれない。この概が基盤となり、伝統となって、今日の東海学会があるばかりでなく、本学会の今後の進路をも示唆されているように思えるのである。

そのため編纂に当っては、慎重に資料の整理を行い、誤りのないよう次の2つに区分して構成した。そのⅠは、まず学会の発展段階を4つに区分した“東海体育学会の沿革”を記載し、さらに過去3回にわたる“全国学会開催”の意義や、当学会が企画して今日まで継続されている重なる事業の経緯、“研究グループの活動状況”、“東海地区体育学研究助成会”の結成と助成内容などを掲げた。そしてさらに歴代会長を中心とした座談会により、本学会の裏話しや、また思い出を懐かしく回顧されている旧会員や、将来を期待し、ご意見を寄せられた中堅会員、若手会員など“会員の声”も掲載して、30年史を飾ることに努力した。最後に現状を踏まえて“今後の課題と展望”を加筆して、その充実を図ったつもりである。

そのⅡは資料編とした、この資料の収集と整理については、川西、山本、鈴木の3氏に作業をしていただいたが、膨大な資料の整理は大変な仕事であった。このうち本学会員の“体

育学研究”掲載論文の題、氏名と、全国学会発表演題並に氏名一覧は、整理しまとめられたが、残念ながら予算の都合で割愛し、図か表にせざるをえなかった。ここに三氏の労力に対し深く感謝する次第である。したがって掲載したものは、沿革年表にあわせて年次別役員の推移、会則の変遷、東海体育学会研究発表の演題と氏名（第1回から30回まで）、東海保健体育科学の掲載論文題、氏名などである。

30年史の草稿に当って、文章の繁雑を避けるため、簡略化した箇所が幾つかあるがご容赦願いたい。また、資料や原稿を収集してから2ケ年を経ているので、文中疑問に思われる点があるかもしれないがお許し願いたい。また編纂を終えた今日、このような大事業の未経験から、不備な点が多く目につき、初期の目的を達することができなかったこと、会員諸兄の期待にほど遠いものになったことは、まことに申し訳ないが、編纂委員としては資料にもとずき、正確で幅広い記録の収録に情熱を傾けたことを了承いただき、お許し願うとともに、欠けた事項や、誤った内容についてはご指摘いただければ幸甚である。

最後に、多くの会員のご協力はもとより、歴代会長をはじめ、関係各位の特に鈴木文明氏には二校以後の校正については、ひと方ならぬご協力をいただき、あらためて謝意を表し後記とする。

編纂委員長	川	口	光	雄
編纂委員	宇	津	野	年
	川	島	虎	雄
	木	村	吉	次
	山	田	久	恒
編纂補佐	川	西	正	志
	山	本	秀	人
	鈴	木	文	明

## 東海体育学会 30年のあゆみ

---

1985年9月1日 発行

編 纂 東海体育学会30年のあゆみ  
編纂委員会

発行者 代 表 川 島 虎 雄

発行所 東 海 体 育 学 会  
〒448 刈谷市井ヶ谷町広沢1  
愛知教育大学体育教室 内

---

印刷・製本 株式会社刈谷高速印刷